

告 辞

本日晴れて東京農工大学より学位を取得された皆さん、おめでとうございます。本学教職員を代表し、心よりお祝い申し上げます。本日は、農学部から学士1名、工学部から学士1名、工学府から修士3名、博士7名、農学府から修士8名、生物システム応用科学府から修士2名、博士2名、連合農学研究科から博士15名、論文博士1名の計40名が本学から巣立っていきます。皆さんが無事に今日の日を迎えることができたのは、皆さん自身の努力はもちろんですが、何よりご家族や友人、そして指導教員など周囲の人々のたくさんの暖かい支援があつてのことです。ここであらためて感謝の気持ちを思い起こし、この喜びを共に分かち合つていただきたいと思ひます。

本日は皆さんの人生にとってひとつの区切りとなります。これまでの学生生活、本学での日々は、決して順風満帆ではなかつたでしょう。課題や論文執筆に苦心し、実験成果が出ず、悩み抜いたことも数多くあつたに違ひありません。しかし皆さんは刻苦勉励してついに乗り越えることができました。それにまず何よりも自信を持つてほしいと思ひます。ただし、当然これで終わりではありません。皆さんが経験した厳しい日々は科学者の日常であり、真価が問われるのはまさにこれからです。皆さん進路はさまざまですが、それぞれにおいてさらに専門性を深め高めつつ、社会人として、また研究者・技術者として、持続発展可能な社会の構築のため、豊かで美しい未来を後世に残すために、累積する課題を解決に導き社会に貢献していかなくてはならないのです。そのような研究に終わりなどあるわけがありません。

『桃栗3年、柿8年』とよく言うと思ひますが、武者小路実篤のこの言葉には続きがあることをご存知ですか？『桃栗3年、柿8年、だるまは9年、俺は一生。』とあります。つまり、実がなるのに桃や栗は3年、柿は8年かかり、かの有名な高僧、達磨大師は悟りを開くまでに9年座禅を続けた、自分は一生精進しなければ、ということですが。私達も同じではないでしょうか。何かを成し遂げて達成感を感じることは大変重要ですが、それで満足し完了してしまつてはいけません。私も研究者になつて何十年と経ちますが、まだまだ学び、極めなければならないことがたくさんあります。ひとつが終わったかに見えてまたその先がある、さらなる疑問が起こ

り、さらなる夢が広がる ― だからこそ科学研究は、そして人生はおもしろいのです。大学という機関も同様だと思います。社会から託された使命を十二分に果たすためには、時代や社会環境の移り変わりに即して大学も変化しなければなりません。創基以来現在に至るまで、本学は140年の長い歴史と伝統を引き継ぎながら、世界と競える先端研究力の強化と高度なイノベーションリーダの養成に力を入れ常に進化を続けています。例えば昨年は、世界各国から各分野を代表する研究者を招いて食料・エネルギー・ライフサイエンス研究のイノベーションの創出や発信を重点的に推進するグローバルイノベーション研究機構を始動させました。その他にも、効果的かつ魅力的なカリキュラム編成や実力のある教授陣の布陣、産業界との連携や国際交流の推進などより良い環境を整えることに注力し、研究機関として、高等教育機関として、本学に所属する一人一人が力を発揮し最大最高の成果を社会に還元するために良いと思ったことには前例にとらわれず果敢に挑戦しています。これからもずっと同じで、これで完成という形などないでしょう。人も大学も、何があっても驕らず焦らず、常に自己を内省し、周囲に目を配り、先を見据えて精進しようという姿勢を保つ、これが『俺は一生。』です。皆さんも是非その気持ちを持ち続けて、より良い未来の創造への貢献という高い理想に向かって歩みを進めていってほしいと思います。

皆さんの今後のご活躍を、同じ研究者として心より応援しております。そして必要とあればいつでも本学を、そして私たちを頼って来てください。一緒に道を探し前進していきましょう。本学も皆さんの力と誇りになれるよう、機動力と柔軟性を武器に世界最先端の研究を担う大学としてより一層努力を重ねていく所存です。皆さんのこれからの奮闘と輝かしい将来に期待し、そして最後に本学のさらなる発展と皆さんの後続く後輩たちのために今後も同窓会活動等を通じてご支援くださるよう併せてお願い申し上げ、ここに告辞とさせていただきます。

平成27年9月16日

東京農工大学長 松永 是